

授業科目	刑法演習
演習題目	国際刑法の現在地—ニュルンベルク・東京からハーグへ
担当教員	土井 和重
授業の目的	<ul style="list-style-type: none"> ○国際刑事裁判所（ICC）を中心とする、いわゆる広義の国際刑事法について概要を知る（中核犯罪、補完性の原則、受理許容性 etc.）。 ○国際刑法に関わる人々、そして日本の貢献について知る。 ○「生ける法制度」としての刑事司法がより良く機能するために必要な視点について、実体法・手続法・政策論の側面から複合的に分析する基礎的な能力（法解釈および問題解決の技法）を涵養する。
履修条件	<ul style="list-style-type: none"> ○刑法Ⅰ、刑法Ⅱ、刑事訴訟法を履修して、日本の刑事法の全体像を知っていることが望ましい（各科目の合否不問、並行しての履修可）。 ○適宜、英語の資料も活用したいと考えているので、得意である必要はないが、英文を読むことに心理的抵抗がないことが望ましい。 （会話能力も必要ではないが、使ってみるつもりがあるとよい） ○サブゼミ生、オブザーバーも、ゼミ生と同様に課題と議論に参加してくれる限り、歓迎する（とにかく参加者全員で上手くやってほしい）。
教科書・参考書	<p>【教科書】尾崎・洪編著『国際刑事裁判所〔第3版〕』（東信堂、2024年）</p> <p>【その他】尾崎『国際刑事裁判所—国際犯罪を裁く』（東信堂、2022年） 東澤『国際刑事法講義』（信山社、2025年）</p> <p>【英文】W. A. Schabas, <i>An Introduction to the International Criminal Court</i>, 6th Ed., CUP 2020. H. Satzger, <i>International and European Criminal Law</i>, 2nd Ed., C. H. Beck 2017.</p>
授業の計画・内容	<p>みなさんは、国際的な司法機関のうちの主要な2つのトップを、現在、日本の法律家が務めていることを知っているだろうか？一つは、国連の機関である国際司法裁判所（ICJ：岩沢雄司所長〔東京大学名誉教授〕）であり、もう一つが国際刑事裁判所（ICC）であり、2024年3月からその所長を務めているのは赤根智子判事（元最高検検事）である。</p> <p>このゼミでは、「生成途上の創作物」（<i>werdende Kunst</i>）であるICCとそれに携わる人々の存在について、まずは知ってもらうことを狙いとしている。赤根所長は、国際刑法を日本に根付かせるためにICC「東京オフィス」の設立に奮闘されている。その壮大なプロジェクトの実現の一端に、私と一緒に参加してみようという新しもの好きな人を歓迎する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業の進め方：基本的には、教科書の記述をベースとして、テーマごとに数名で報告してもらい、それを基に全員で議論を行うことを考えている。具体的には、開講時に参加者と話し合っ決定したい。 ○授業の内容： 〔前期〕ICC 規程の具体的な内容として、①ジェノサイド罪、②人道に対する犯罪、③戦争犯罪、④侵略犯罪、⑤刑事責任に関する実体法的側面に焦点を当てて検討する。その中では、具体的な事例問題の分析も行いたいと考えている。

	<p>〔後期〕ICCの手続的な側面に焦点を当てて、①管轄権の問題、②捜査手続、③裁判手続の概要を把握する。その上で、比較法的な考察を行う素材として④ドイツ国際刑事法典を取り上げて(英文)、ICC規程ないしは日本の刑事司法制度との相違についても考えてみたい。</p> <p>○ゼミ論文の執筆： 年度末にゼミ論文を提出してもらおう(単位認定の条件：オブザーバー参加者は任意)。前期末を目処にテーマ設定を行い、後期中に授業と並行して執筆の指導を行う。なお、邦語文献のみに基づく論文で差し支えないが、資料の数に限りがあるので、共著の形でもよい。</p> <p>○その他：このゼミでは、オンライン会議を活用して、海外の研究者や実務家にインタビュー形式で話を聞く場合がある(英語・ドイツ語)。また、私が参加する予定のマールブルク大学の研究者養成プログラム(ボック教授「国際刑法におけるジェンダーの視点」)と内容的に一部リンクさせる可能性がある。将来的には、毎年ニュルンベルク高等裁判所で実施されている模擬裁判への参加の可能性を模索したいと考えているので、一緒に知恵を絞ってくれると大変有り難い。 〔参考〕Nuremberg Moot Court 2025 – Finals： https://youtu.be/jJoEu_jojZE?si=8aDo20XSzY8ndlx6 また、国際刑事裁判所のリアルについて： 赤根智子『戦争犯罪と闘う』(文春新書、2025年) 越智萌『だれが戦争の後片付けをするのか』(ちくま新書、2025年)</p> <p>○質問等：新規開講のため、内容や課題等について質問があれば、遠慮なく、下記のメールにご連絡ください。個別に回答します。 kdoi●kitakyu-u.ac.jp (●を@に変換してください)</p>
成績評価の方法	<p>概ね以下の基準で評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告(プレゼン方法の工夫、追加的調査の質量など)：40% ・授業への参加・貢献(積極的な発言、円滑な運営への協力)：40% ・ゼミ論文：20%